

# 日本語クラスでの写真の使い方

——文章表現クラスの活動を通して——

河 内 千 春

キーワード

文章表現クラス 写真 素材 表現 メッセージ

## 0. はじめに

筆者は2001年度春学期から2003年度秋学期まで、文章表現クラス（5レベルと6レベル）を計8クラス担当した。クラスでは、「レポートの書き方」の類の教科書を使って書き方の形式を教えること、あるテーマを与え、それについての自分の文章を書かせること、この二つの活動を中心に行った。テーマは、自由という場合もあり、新聞記事のような文字で書かれた素材を与える場合もあり、また、文字の代わりに写真を素材として与える場合もあった。

本稿では、文章表現の活動の中から、写真を見て日本語で文章を書くという活動（クラス全14回のうちの3～4回）を行ってみて気づいたことを中心に、文章表現クラスにおける写真というメディアの効果的な使い方について述べてみたい。

本稿は、筆者自身のWEBサイト『夢旅人』の中の「一枚の写真から日本語表現へ、コミュニケーションへ」及び「写真を読む(1)～(5)」をまとめ直したものである。<sup>1)</sup>

## 1. 日本語教育における写真の役割

日本語教育においては、写真は視覚教材または映像教材の一つとしてとらえられている。『日本語教育ハンドブック』（1990）によれば、「言語教育の中での視聴覚教育の役割とは、人間の五感の働き（場合によっては第六感も含め）を有利、優位に活用し、言語習得の効率・効果を高めようとするものである。」また、保崎（2002）によれば、「教育において、映像は効果的な学習教材であるという認識は、適切な映像が言語理解の助けになるという点において、ほとんどの教授者／学習者の間で一致しているだろう。つまり、補助効果という指摘である。」

つまり、写真は言語内容の理解を助けるために使われていることが多く、筆者自身こういう使い方をしてきたのであった。もちろん、この使い方を否定するものではない。

水野（1998）は、「メッセージは、記号からなる。記号は大きく分けて、言語記号と非言語記号に分けられる。言語記号は、音声記号（話し言葉）と文字言語（書き言葉）からなる。言語記号に準じた記号として顔の表情・身振り・手振りなどの身体記号がある。また、非言語記号として、映像や音像（物音や音楽）がある。これらの記号が組み合わせられてメッセージが作られ、メディアを通して伝えられるのである。」と述べている。

- 
- 1) 『夢旅人』の URL は、<http://www.aoni.waseda.jp/kawachic>  
「一枚の写真から日本語表現へ、コミュニケーションへ」  
<http://www.aoni.waseda.jp/kawachic/w-kyoushi/shashinnkara.html>  
「写真を読む(1)」文章表現クラスの新しい試み  
<http://www.aoni.waseda.jp/kawachic/w-kyoushi/shashin.html>  
「写真を読む(2)」ハチ公の裏話  
<http://www.aoni.waseda.jp/kawachic/w-kyoushi/ron2.html>  
「写真を読む(3)」文章と写真は違う  
<http://www.aoni.waseda.jp/kawachic/w-kyoushi/bunshou-shasin.html>  
「写真を読む(4)」佃島  
<http://www.aoni.waseda.jp/kawachic/w-kyoushi/tsukudajima.html>  
「写真を読む(5)」佃島と神田川  
<http://www.aoni.waseda.jp/kawachic/w-kyoushi/tsukuda-kanda.html>

このことから、筆者は写真もコミュニケーション・メディアのひとつであり、文字と同様にメッセージを伝えることができるということに気づき、写真そのものを教材にできるのではないかと考えてみた。

そこで、まず第一に、写真というものに単なる言語理解の補助としての役割ではなく文章表現を引き出すための素材としての役割があるかどうか検討してみたい。方法としては、クラス活動を通して疑問点を解決するというものである。

また、クラス活動の中で新たな疑問点となったところを次のクラス活動の中で解決していくという形で論を進めていきたい。

## 2. 文章表現を引き出す素材としての写真

2001年度秋学期の6 Eクラスと6 Fクラス（計17人）では、写真1を見せて、日本語で文章を書かせるという活動を行った。



写真1 渋谷のハチ公前の風景

この写真1は、写真家阪上恭史氏から個人的に日本語教材用としてもらった写真全14枚の中の一枚である。この写真を選んだ理由は、学生全員が渋谷へ行ったことがあり、ハチ公の話日本語教科書で習った、映画を

見たという学生も多かったからである。既知の情報が多いことは、写真の中に見えるものが多くなる可能性もあり、逆に、見えるものが特定される可能性もあるだろう。しかし、どちらにしても、学生たちが写真の中から一つの情報を選びやすくなるだろうとの判断である。撮影者の阪上氏によると、「主人を待ち続けるハチ公の銅像が人々の待ち合わせの目印になっているのとハチ公は渋谷駅前の風景と人間の変わり様をどう見ているのかと思って撮りました」ということだった。

この写真は、ハチ公について書かれた文章の内容理解を助ける目的で使用するのではなく、また、撮影者の特定の意図を解釈させるものでもない。「ハチ公の写真」という言葉を使っているが、写真の中にハチ公を見なくてもかまわない。何を見るかは各学生の自由である。「自分自身が写真の中に見たものを、自分の言葉で表現しなさい。レポートでもエッセイでも日記でも小説でもかまいません。」と指示した。

学生17人の作品の中から2作品の一部を紹介する。<sup>2)</sup>

#### 学生A 願い

昼でも夜でも私は大勢の人に囲まれている。しかし、誰一人も私に気を配っている人はいない。段々寒くなっているのに誰一人も暖かい毛布一枚かぶせてやる人もいない。

このころ、私はここにいるのが段々つらくなる。段々悲しくなる。何より悲しいのは人間がますます人間らしくない姿に変わってくるのを見ているのだ。現在の瞬間的な快楽だけを追求する人間たち、未来がないようなわがままな生活をする人間たち、私は彼らを見ている度にここを脱したい。

...

---

2) この作品の残りの部分と他の学生の作品は以下のサイトで公開中  
<http://www.aoni.waseda.jp/kawachic/01ryugakusei/hachiko6e.html>  
<http://www.aoni.waseda.jp/kawachic/01ryugakusei/hachiko6f.html>



学生B

彼女とカノジョの物語

綾子：私の名前は綾子。今年13歳。上の写真に見える左の女の子よ。どう？結構かわいくない？趣味はスキー。そして温泉が大好き。特技はうん～なんだろう。しゃべりぐらいいかな。今日は天気超いいな。…

真帆：自分の名前は真帆です。今日、実は自己紹介なんかするどころじゃないんです。ごめんなさい。初対面なのに、もっと明るい姿を見せるべきなのに…

他の作品は、ハチ公そのものについての解説を書いたものが2作品、ハチ公の物語から忠誠や友情などの概念に発展させて論じたものが2作品、ハチ公→犬→ペットと発展させてペットについての自分自身の経験や考えを書いたものが5作品、「待ち合わせ」をキーワードにして出会いと別れを小説風にまとめたものが2作品、渋谷という街についての経験と意見を書いたものが3作品であった。

ただ一度のクラス活動の実践から、写真とは、文字と同様にメッセージを伝えることができるメディアであり、写真には単なる言語理解の補助としての役割ではなく文章表現を引き出すための素材としての役割があるという結論が出てしまった。

マスターマン（1985）は「写真の意味を正確にとらえることはむずかしい」と述べている。その理由は「視覚画像は多義性であることである。一つの画像の中に競合するサインシステムがなだれ込み、詳細に見ていくにつれて様々な意味の可能性が広がっていくのである。画像を理解するためには焦点を絞り、他のものを捨てて、ある詳細な部分に集中する必要がある。しかし、画像自体の中には何が重要で何が重要でないかを示すものはない。（p 71）」からである。

写真1だけを見ると、「多義性」という言葉の意味がよく理解できる。多義性であるから、人によってさまざまな見方ができ、教師や撮影者が意図していた以上に多様な解釈が行われたのである。しかし、写真を見ること

は文字で書かれた文章を読むことよりさまざまな見方ができるといえるのだろうか、つまり、写真は文章と比べて解釈の幅が広いといえるのだろうか。このような疑問が出てきた。

### 3. 写真と文章の解釈の違い

2002年度春学期の文章表現クラス5 Eでは、2回に分けて文章と写真を素材として与え、文章を書かせるという活動を行った。一回目は、「犬のどうぞう」という日本語教科書（国際学友会日本語学校日本語読本1）に出ている文章を、授業一回目に現在の日本語文章能力を測るという目的で使った。二回目は、前学期と同じハチ公の写真（写真1）を見て自分の言葉で自分らしい文章を書くという目的で使った。どちらの時も、学生たちに目的をはっきり説明しておいた。

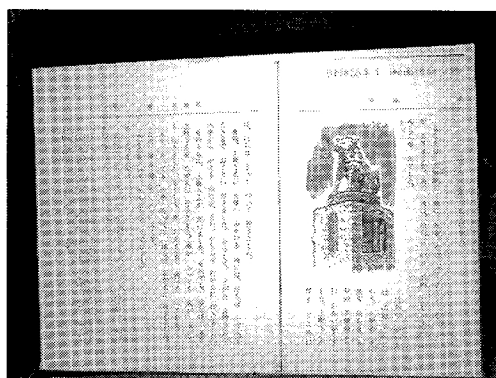


写真2 犬のどうぞう

以下、C・D・E、3人の学生たちの作品の一部を見ながら、まとめてみたい。1はく「犬のどうぞう」を読んで、2はく「写真」を見て書いたものである。<sup>3)</sup>

---

3) C2・D2・E2の残りの部分と他の学生の作品は以下のサイトで公開中  
<http://www.aoni.waseda.jp/kawachic/0203ryugakusei/02hachiko5e.html>

## C-1

渋谷駅はいつも人で込んでいる駅です。あそこにハチ公という口があります。ハチという忠犬を記念する銅像があるというわけです。

ハチは自分の飼い主を早に送ったり晩に迎ったりして、雨でも風でもそれを続けていました。それで、人々はその主人に対する忠実に感動して、忠実を標識するハチを銅像にしました。…

## C-2

写真の中で一番目立つのはやはりハチ公の銅像です。つぎに、すぐ銅像のそばにいて焦っているみたいな二人の女の人です。そのまわりはちょっと人で込んでいる感じですが、みんな待ち合わせをしているみたいです。

確かにそうです。友達と遊びに行くことにして、待ち合わせの場所を決めるときに、新宿なら西口か東口にしますが、渋谷のほうならハチ公です。この場合は、ハチ公と新宿や渋谷一緒に、場所の名前に過ぎないといえます。それは銅像建造者の最初の意図に外れているかなと思います。

最初の意図というと、ハチ公についての物語をもう少し説明しなければなりません。ハチ公はずっと可愛がられていた主人が亡くなっても、雨の日も風の日も、毎日毎日、渋谷駅前で主人が帰って来るのを待ち続けていました。主人を慕うハチ公の途な姿は、人々に深い感銘を与え、忠犬と呼ばれるようになりました。そして、一躍有名になった「忠犬ハチ公」を讃える銅像が渋谷駅前に作られました。その銅像を見て、ハチ公の物語を思い出して、人々が感嘆したり、真似したくなったりすることによって、この得難く単純な感情がこの世の中に広がって大切にされ続けていくのは、建造者の最初の意図だといえましょう。…

## D-1

この文章を読んだあと、もちろん私もはちのような犬を買いたいです。昔から人間と犬の間にずっとものすごく深い感情があります。飼い主のため

に、どこへ迎えに行くこともよくあります。まだ、飼い主を喜ばせるために、特別な技を必死に学んでいる犬も少なくないでしょう。つまり、何百年前から今にかけて、犬の心はずっと飼い主の方へ向っています。…

#### D-2

私はハチ公の写真を見ると同時に、心に思い出したくないことが浮かべた。私はまだ、中学生のときに、ちちの知り合いのおじいさんに一匹のワンちゃんをもらった。台湾で、中学生は高校入学試験のため、一生懸命に勉強している。当時に私の生活はとてもつらくて、大変だと感じられた。毎朝6時にくらい起きて、夜遅くまで寝て、いつも同じ形で生きている私にとって、あの犬は神様からもらった宝だと思っていた。…

#### E-1

始めて渋谷に行った時が頭の中に思い浮かんできます。数えきれない人々が通りかかる渋谷駅ですぐ目に入ってきたのは、ある犬の像でした。私は気になりはじめてさっそく日本人の友人に聞いてみました。その友人はこの文章と同じことを私に聞かせてくれました。それを聞いた瞬間、私はものすごく心を打たれました。…

#### E-2

今回の課題の写真を目にした瞬間、私の目を引いたのはハチ公銅像の下にいる二人の女の子達だった。彼女達を見た瞬間すぐ大切な友人たちを思い出した。私は日本に来て今年で3年目になるが、来てから2年間は一度も国へ帰らなかった。もちろん物凄く友達が恋しかったが、目指していた大学に合格できるまでは絶対戻るまいと決心していたからだ。そして、念願の学校に合格でき今年の2月に2年ぶりの里帰りをした。帰る飛行機の中で友達に関して色々思った。その時考えた私の感情と思いを今回の作文で述べたいと強く思った。…

四月に「犬のどうぞう」を読んだ時には、もう既に学生たちは渋谷の街へ何度も行ったことがあり、ハチ公の銅像を見たことがあり、日本語学校でハチ公の話を習ったことがあった。文章の中からハチ公の感心さの部分だけを読み取って、その感動だけを表現しているわけではないのである。また、上でも述べたように、「犬のどうぞう」の文章は日本語能力を測るために利用したもので、ハチ公の感心さについて読み取ってほしいという希望はなかった。

六月に写真1を見せた時には、四月の文章を思い出して、その話を続けた学生と全く関係ない新しい見方を表現した学生が出てきた。学生Cは、ハチ公の銅像建造の意図について取り上げ、内容を発展させている。学生Dは、ペットを飼うことについて、具体的な経験に発展させている。学生Eは、四月の文章からはハチ公の感心さに感動し、六月の写真では、ハチ公ではなくその前に立っている女の子たちを見て、自分自身について表現している。

結局、学生たちがどんな文章を書くかということは、文章と写真という素材の違いよりも、教師の教材（素材）の与え方や学生本人の興味の持ち方や書きたいという意欲によるのだということがわかった。教師が教材を通じて何を与えたいのか、例えば、ハチ公の感心さや忠実さという点について考えさせるということを目的として文章を読ませるのであれば、学生たちがその部分に注意を向けるように持っていかなければならないだろう。しかし、ある文章を解釈するのに、正しい解釈のしかたなどあるのだろうか。教師の解釈と一致した場合に正しいと言っているだけではないのだろうか。作者の意図は作者自身にしかわからないことであり、直接作者に聞いてみることはなかなかできないことであろう。逆に、教師がある特定の解釈を導き出すように進めなければ、学生たちがいろいろな見方をしているのがわかる。解釈のしかたはさまざまなのである。

では、写真は文章と比べて解釈の幅が広いのだろうか。確かに、一枚の

写真の中には文字で書かれた文章以上に多くの情報がつめこまれている。しかし、文章を読んで解釈することが、文字によって書かれた部分の意味を理解するだけではなく、書かれていない部分までも理解することであると考え、写真は文章以上に解釈の幅が広いとは言えないのではない。もちろん、教師が写真の中のあるものを特定して見せることもできる。言葉によって説明することで、ある部分だけに注目させ、特定の見方を与えることができ、他の部分を見えなくすることができるのである。言葉には写真に写っているものにある意味を与えて理解させるという働きもあるが、逆に、その言葉の力で他の見方をする自由さが失われるということもある。

このクラスの活動のように、自由な文章表現を行うための素材とするなら、文章も写真も変わらない。写真は文章と比べて解釈の幅が広いとはいえないという結論を出すことができた。

次に、写真はどんな写真であっても同じようにさまざまな解釈ができるのだろうかということが疑問となってきた。

#### 4. 写真の持つメッセージ性

2002年度秋学期の5Eクラスでは写真3を使った。この写真も阪上氏からもらったものの中の一枚である。

クラスで見せたところ、場所がどこかわかった学生はいなかった。それで、「ここは佃島というところ」「東京都内」「海の近くだが銀座からも近い」など場所の説明から始め、次に、佃島の歴史について簡単に説明し、解説のサイトがあることを教え、この写真を素材にしてレポート風でも小説風でも自分の好きなように文章を書くように指示した。提出された2例をあげておく。<sup>4)</sup>

---

4) 他の学生の作品は以下のサイトで公開中

<http://www.aoni.waseda.jp/kawachic/0203ryugakusei/02tsukuda.html>

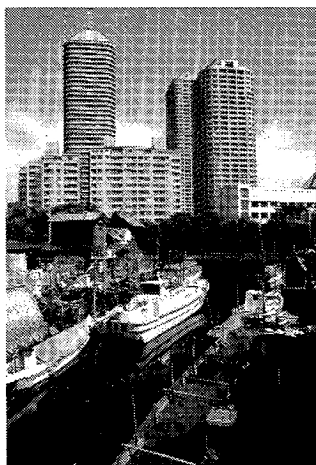


写真3 佃島

学生F

大川端リバーシティ21の高層ビル群と住吉神社、朱塗りの佃小橋、古き良き民家などとの対比が素晴らしい。この風景に現在の日本の縮図が見えると思われる。経済の発展により、いろんな古いものを壊れてしまうのが仕方のないことと思われる人は世の中に数多くいるだろう。現実もそうである。中国の大都市に行ってみれば、伝統的な建築がどんどんなくなってきた。残念だなと感嘆する一方で、その東京の佃島を見るべきことと思われる。なぜなら、日本の場合は、経済の発展と伝統の保護がある程度バランスをとっている。そのお陰で、今の写真のような「新」と「旧」という感じが対照できる素晴らしい景色は見られる。それはただ景色の素晴らしい所ではなく、国の発展の素晴らしい所と思われる。

学生G

この写真を細かく見たと、私はびっくりした。私がびっくりしたのはこの写真に高い建物下に古い神社があったのである！東京は国際大都市として、人口密度が高く、市内土地がもちろん高い。写真に撮ったところが商

業中心であって、当地の地価がもっと高いと思う。もし、その神社を廃止して、神社の変わりに、商業或いは会社の建築を建造する、経済利益がとて高いと思われる。でも、その古い神社が現代化のビルの近くにある。日本は古い伝統をよく守る国だというのは本当だと思う。

多くの学生が「新と旧」「過去と現在」の対比について述べ、そこから自国の発展と関連させて考え、伝統を守るという意味を考え、住宅問題について、日本文化について、人間関係について自分の考えを広げている。筆者自身この写真を初めて見た時、手前にある運河と船、奥に高層マンション、この二つのものの対比が直観的にいいと思った。撮影者もこの対比をメッセージとして伝えたかったそうである。つまり、この写真は、前回のハチ公の写真よりは解釈の幅が狭い、言い換えると、メッセージ性が強いと言えるだろう。

「写真は多義性である」とはいうが、写真1のように、一枚の写真の中の部分部分にさまざまなメッセージを読み取ることができるもの、つまり、さまざまな解釈ができるがメッセージ性の弱い写真と、写真3のように誰が見ても同じメッセージを読み取ることができるもの、つまり、解釈の幅は狭いがメッセージ性の強い写真があるということが明白になった。写真はどんな写真であっても同じようにさまざまな解釈ができるというわけではないのである。

では、学生たちにとっては、さまざまな解釈ができるがメッセージ性の弱い写真と解釈の幅は狭いがメッセージ性の強い写真のどちらを見たほうが文章を書きやすいのだろうか。

## 5. 文章を書きやすい写真

2003年度春学期では、写真3と写真4を見せ、二枚から一枚選んで文章を書かせた。

写真4は、2001年春に神田川の面影橋で筆者自身が撮ったものである。





写真4 神田川の桜

満開の桜，季節の移り変わり，昔から毎年めぐってくる自然のサイクル，背景には高層マンション，自然美と人工美との対比を表現したいと思ったのである。佃島の写真を見たのは2001年夏なので，プロの作品を意識して撮ったのではなかった。ただ，何となく雰囲気似ているように思えたので，クラスで使ってみようと思ったのだ。

作品を提出した23人の学生のうち，写真4を選んだ学生が19人，写真3が4人。圧倒的に写真4が多いという結果となった。神田川の桜について書かれた3作品の一部を紹介する。<sup>5)</sup>

#### 学生H

神田川の写真を初めて見た時に，心の中で小さく「桜満開の神田川だ」と叫びました。それは春の神田川には，私のいい思い出があるからです。2003年3月31日（神田川桜祭りの日）の午後，私を含めて三人は，一番親しい友達の李さんといっしょに，神田川の桜を楽しみました。彼女は外国人訪問学者として一年間日本で研修していて，翌日の4月1日に韓国のソ

---

5) この作品の残りの部分と他の学生の作品は以下のサイトで公開中  
<http://www.aoni.waseda.jp/kawachic/0203ryugakusei/03kandagawa.html>

ウルへ帰る予定でした。帰国前に、李さんが何回も「日本の桜を見たいなあ。去年3月に日本に来た時に、桜はもう散っていた。で、今年の開花情報によると、満開は4月3日から10日までみたい。もし一年間日本に住んで、満開の桜を一度も見たことがなければ、残念だね。」と言いました。

...

学生 I

今日は神田川の写真を見た。実は、この写真の中心にあるのは川でなく、咲いている桜木だ。川の上にある橋からみると、水の方に曲がっているピンクっぽい桜の花が見える。でも、この花を見て、初めの印象として「きれい」という気持ちではなく、なんか「かわいそう」と感じた。なぜかと言うと、川の堤が両方からセメントで固めているし、桜並木の裏には東京の高層ビルが見えるし、この桜は監禁されているという感じがあったからだ。もちろん、桜は大都市の真中に咲いている場合、この都市が生きているという感じがあるけれども、実は、生きているものは、かわいそうにセメントに向かわされた桜だよ！...

学生 J

今日は4月4日、君に出会って、三周年の記念日です。最後まで君からの連絡はぜんぜんこなかったけれども、僕は一人で、神田川へ花見に行きました。君の美しい姿を待っていましたが、奇跡も起こりませんでした。神田川も静かに流れているし、桜も静かに咲いているし、緑の橋も静かに僕を見守っている感じがしました。歩きながら僕たちの三年間の事を思い出しました。三年前の今日、君が白いセーターとジーンズ姿で僕の目の前に現れた瞬間から今まで、僕の心の中にずっと不思議な感動をもっています。...

作品について詳しく見ていくと、佃島について書いた学生は、く新・旧の

対比〉に注目し、〈これが現代日本の姿そのもの〉とまとめている、前学期と比べてみても、多少言葉の使い方に違いはあるが内容に変わりはない。これはやはり、撮影者のメッセージがこの写真を通して強く伝わっているということであり、逆にいうと、さまざまな解釈がしにくいものであるといえる。

それに比べて、桜のほうは、学生H・I・Jに見られるように、自分自身の花見体験、桜の木や川などの自然から、〈環境問題〉に発展させたもの、短編小説、その他に、「日本に来たら花見というのをしてみたい」という憧れ、日本文化論的な分析…などの〈花見〉をテーマにしたもの、〈神田川という川〉についてのWEB記事を利用して、コピー＆ペーストだけのもの、魚の視点で書き直したもの、教師と生徒の対話風に書き直したもの、日記や手紙の形式で書かれたものなど、さまざまな作品があった。これは、佃島より神田川のほうが身近なところにあるともいえるが、この一枚の写真の中にさまざまなものが見えてくるからであり、その点で写真1に近いものだといえるだろう。

このクラスの活動のように自由な文章表現を行う場合、学生たちにとっては、さまざまな解釈ができるがメッセージ性の弱い写真よりも解釈の幅は狭いがメッセージ性の強い写真を見たほうが文章を書きやすいということがわかった。

## 6. 文章表現クラスでの写真の効果的な使い方

以上のことから、写真の特性について次のようにまとめることができる。

- ・写真は文字と同様にメッセージを伝えることができるメディアであり、写真には単なる言語内容の理解の補助としての役割だけでなく文章表現を引き出すための素材としての役割がある。
- ・写真は多義性であるとはいいが、文章と比べて解釈の幅が広いとはいえない。

・写真はどんな写真であっても同じようにさまざまな解釈ができるというわけではない。さまざまな解釈ができるがメッセージ性の弱い写真と、解釈の幅は狭いがメッセージ性の強い写真がある。

これら写真の特性を理解した上で、文章表現クラスの中で表現を引き出すための素材として写真をどのように使えば効果的であるのかまとめてみたい。文章表現を引き出すとは、各学生にレベルに応じた文章表現能力を習得、発展させることである。

一つの方法は、メッセージ性の強い写真を見せ、共通のメッセージを伝え、特定の文体で文章を書かせるというものである。例えば、写真3を見せ、佃島の新・旧の対比というメッセージに注目させ、その対比を作り出した日本人や日本文化について、自分自身が既に持っている知識と合わせて意見をまとめ、レポート形式の文章を書かせるというものである。中級レベルでレポートの書き方を集中的に教えたい場合に効果的であると思われる。この一枚の写真は、あるテーマを持った文章と同じ働きをしていると言えるであろう。

メッセージ性の弱い写真であっても、教師の言葉と組み合わせることにより、あるメッセージのみを伝えることができることができる。学生のレベルが初級～中級前半程度の場合は、教師が写真の中の特定部分を示し、それについて特定の文体で文章を書かせるという方法が効果的である。例えば、写真1のハチ公の部分に注目させ、今の渋谷の街についてハチ公の視点、つまり、自分が渋谷の駅前に立って渋谷の街を見て気づいたことについてレポートを書かせるという活動ができる。また、写真4の桜の部分に注目させ、自分自身の花見体験を思い出してエッセイ風の文章を書かせるという活動もできるだろう。

もう一つの方法は、筆者自身が行ってきたクラス活動のように、一枚の写真の中から学生自身が注目したい部分を選び、それについて自由な文体で自分の文章を書くというものである。学生たちが既にレポート・エッセ

イ・手紙・日記・小説などの文体の違いを理解し、書き分けることができるレベル（中級後半以上）であることが条件となる。2と5で述べたように、写真1や写真4のようなメッセージ性の弱い写真を使うのが効果的である。

以上、文章表現クラスの中で写真を効果的に使うためには、教師自身が写真の特性を把握し、学生のレベルに応じた文章表現能力に結びつけるための適切な写真を選ぶこと、言葉によって写真からのメッセージをコントロールすることが大切であると思われる。

## 7. 今後の発展

一枚の写真の中から学生自身が注目したい部分を選び自分の文体で文章を書くという活動の発展として、各学生が書いた文章をコピーして全員に配り、どの作品が気に入ったかを各学生が選ぶという活動ができる。2001年度の春学期と秋学期で実践した結果、他の学生がどんな文章を書いたかがお互いにわかり、学生たちには評判がよかった。どの作品が気に入ったかは人それぞれであったが、自分と違う見方をしたもの、自分には書けない文体で書かれたものに人気が集まった。文章表現から読解・口頭表現・聴解などの言語コミュニケーションへ発展した活動といえるだろう。

21世紀の日本語教育は、言語コミュニケーションの教育から身体・映像・音像などのコミュニケーション・メディアと言語を組み合わせたメディア・コミュニケーションの教育へと変わっていくだろう。これは、文部科学省が強調する情報教育とも関連するものである（保崎 2002）。このようなクラスを担当する日本語教師は、例えば写真という映像に関しては、写真の特性や写真と言語の関係について理解するだけでなく、写真を撮る技術（プロ並みでなくてもよい）を持ち、著作権や肖像権などについての知識を持つことも必要となるだろう。

#### 引用文献

- 日本語教育学会編（1990）『日本語教育ハンドブック』大修館書店
- 水野博介（1998）『メディア・コミュニケーションの理論』学文社
- レン・マスターマン著／宮崎寿子解説抄訳（1985／2001）「メディアを教える」鈴木  
みどり編『メディア・リテラシーの現在と未来』世界思想社
- 保崎則雄（2002）「映像利用におけるさまざまな問題点と課題」城生伯太郎編『映像  
の言語学』おうふう